

販売する時代ではない で薬局を物質がん発

ドラッグストア主催の
禁煙啓発講演で皆さんに
伝えました。



海外でつくられたタバコの害についての映像に見入る来場者。

明治33年創業の杏林堂薬局は、現在店舗数を46まで増やし、特色ある事業展開を行なっています。ホームページには、『異質を作る！』『失敗を恐れない社風』を徹底すると明記しており、個性ある店づくりで市民生活の支援を目指しています。

様々な地域住民への啓発活動をしています。このたび、タバコの害啓発を目的に「市民健康フォーラム」と称した講演会を開きました。既に数社からニコチン貼付剤がOTC（一般用医薬品）販売されており、ニコチンガムや禁煙関連商品を合わせると、ひとつのコーナーができるくらいになりました。

(投稿 私の呼びかけ)

企画開催までの 舞台裏

わが国のニコチン貼付剤の歴史は、ノバルティス社に1日の長があります。T.T.S (Transdermal Therapeutic System: 経皮吸収システム)をいち早く開発・導入し、皮膚からの安定したニコチン供給を可能にしたからです。

既に平成11年(1999年)5月から貼付剤を市場に送り込んでいるのです。ノバルティス社のOTC事業部と杏林堂薬局との共同企画は、喫煙容認国家の喫煙者に禁煙のキックケを与えることでしょう。

私は、禁煙啓発講演会講師を受けるに当たり、立案した幹部にプレゼンテーションし、喫煙の有害性を知らされずに、大勢が犠牲になっている現実を伝えました。そして、450名の正社員、1600名以上のパート職員が誇りに思えるような杏林堂薬局を目指しましょうと進言しました。

タイトルは「市民健康フォーラム

——愛する貴方を守りたい」、副題を「家族から父の日に贈る思いやり」とし、参加しやすい雰囲気仕向けました。A3サイズのポスターが46店舗に掲げられ、毎週火曜日には、杏林堂薬局の折り込みチラシが各家庭に配られました。

開催日時は、2009年6月21日、開演は14時からで会場はアクトシティ浜松コングレスセンター4階(43・44会議室)でした。

事前にハガキで申し込み、抽選でペア125組250名に限定する計画です。こういう取り組みがあると、各家庭での様々な攻防が目に見えなくなります。

一例を挙げれば「何が何でもタバコを止めさせたい」奥さんVS「俺のことは放っておいてくれ」亭主の図式です。きつと店頭でポスターを見かけた奥さんが、祈るような、念じるような気持ちでハガキに書き込んだことでしょう。

およそ3ヵ月間の準備期間がありました。効率的なイベントにするために、産婦人科医及び歯科医からの

コメントを準備しました。

産婦人科医と 歯科医の援護射撃

コメントーターは、浜松市浜北の石井第一産婦人科クリニック院長の石井廣重先生、浜松市中区のくまがい歯科クリニック院長の熊谷真一先生です。

司会者は古賀玲子さんに依頼し、私は黄色、石井先生はシルバー、熊谷先生は紺というように色違いの禁煙ネクタイを締め、司会者の古賀さんは白色の禁煙スカーフを巻いて臨みました。毅然とした主催者側のスタンスは、良い影響を及ぼすと考えてのことです。

前日に、浜名医師会が学術総会を開催し、北海道から日本禁煙学会・理事の松崎道幸先生を招聘していました。松崎先生は、アグレッシブかつ学究的でありながら、市民活動も理解される臨床家です。

翌日の杏林堂薬局の企画に対して「市民・県民の皆様の健康増進のためのお仕事をなさっておられる会社

の社会的責任をしつかり果たされることにつながり、非常に意義深いこと」とメッセージを頂きました。

この言葉は杏林堂薬局の幹部の胸に響いたでしょうか。杏林堂の青田副社長による企業活動紹介の後、基調講演の私の出番になりました。

基調講演——家族から父の日に贈る思いやり

聴講者は成人く壮年の方々でしたので、従来のプレゼンテーションを変えて臨みました。伝えたいことは、タバコの真実・現実・事実です。そのために準備したのは13の動画映像を含む116枚のスライドです。

まずクイズ形式で、種々の伏せられたタバコ問題の甚大さを知ってもらいました。趣味・嗜好と誤認させられて現実に20万人ほどが犠牲になっているが、誰もそのことに気づかない事実。如何にして海外放送局製作の動画映像が、「世界から取り残されている奇異な国、日本」を伝えているのか問題提起しました。

「世界中が禁煙しても俺は禁煙し

ない」人は、世界中にごまんといる」。

例えば、

「タバコ税収が減って困る自治体は多いが、個人では誰もいない」

「もう一度生まれ変わってもタバコに手を染めますか？」

など直接喫煙者本人の心に響く言葉で問いかけました。中でも、映画俳優のユル・ブリンナーさんの動画映像からのメッセージ「私はこの世にいないかもしれないが、ひとつ言えることは、タバコは止めなさい！」大勢が衝撃を受けました。肺がんを患った彼は、自分の人生を賭けて禁煙啓発メッセージCMを作りたかったのでしよう。

壇上から参加者の表情を見ると、少しずつ変っていくのが判りました。「そんなに悪くないタバコ」から「そこまでタバコは悪いのか」という意識の芽生え。そして、「やはり禁煙はすべきだろう」から「こんなものを規制しないで販売するのがおかしい」へと意識段階が変化していきました。

急流下りのアニメーション

さらに喫煙者への心の支えとして、スライドで川の上流から濁流をカヌーに乗って移動する画像を見ていただきました。禁煙の決意と同じくらい、大切なことは灰皿やタバコと決別することです。「私はスパッと止めたい」意思表示で周囲からの支持が得られます。果敢に急流に飛込むには、それ相当の覚悟が必要です。生半可な気持では達成できないことですから。

ごつごつした岩を避けて、もみくちゃになりながらカヌーは中流域へと進みます。この間、川岸から様々なエールが聞こえ、それが励みになります。孤独な戦いではなく、大勢からの賛同が励みになるのです。やがて川の流れは遅くなりますが、まだまだ油断はできません。そして下流になり、もうひと安心です。

川岸から達成を称える拍手が聞こえてきます。ようやく安堵の表情になります。このように周囲からの応

(投稿 私の呼びかけ)

援が、止めたい喫煙者の支えになります。実際に、ひとりで禁煙に立ち向かうには、困難と思われれますが、「失敗したらどうしよう……」「私はできないかもしれない」などのネガティブな発想は、喫煙者の心の中にしか存在しない障壁なのです。ただただ周囲は、頑張つてと応援し続けられればいいのですから。

受動喫煙追放宣言

会場では、海外で実際に放映されている受動喫煙による健康被害CMを伝えました。米国では、タバコの



市民健康フォーラム開催に携わった主要な方々(筆者、前列左から4人目)。

煙は自動車の排気ガスとほぼ同じとの認識です。飲食店で喫煙者がいても謙譲の精神を有する日本人は耐え忍びますが、米国・加州^{カリフォルニア}ではそうではありません。

続いて、最後のスライド、「受動喫煙追放宣言」に賛同いただける方は拍手をお願いしますと提示したところ、期せずして会場から割れんばかりの拍手がありました。

産婦人科医の石井先生は開業時から、クリニック敷地内禁煙と母乳保育を実践されています。WHO勧告により世界中に知れわたるべきことなのに、わが国の薬局・薬店では粉ミルクが店頭に並ぶ現実、わが国のタバコ対策とよく似ているとコメント。最近では若い女性の喫煙率増加が目立ちます。そのまま妊娠すると低体重児が生まれやすくなり、将来にわたって悲劇は繰り返されるので、何としても対策が必要と指摘。

一方、歯科医の熊谷先生からは、歯周病や口腔内^{こうくう}の悪性腫瘍^{しゅよう}を引き合いにして、歯科領域の治療効率は、禁煙しないと悪いままであると強調。

切実なる産婦人科や歯科医からの進言を、参加者はどのように感じ取ったでしょうか。

今後の杏林堂薬局の歩むべき道

2700万人と推計される現役喫煙者の70%は、禁煙のキツカケを待っています。ただし、短命に仕向けられている現実気づいていません。現在では保険適応の禁煙外来は、8000箇所まで増加しましたが、「特殊な治療」と解釈され周知されていません。受診者も全体の10%以下に過ぎません。そこで薬剤師さんの登場です。数多くの相談を受ける薬剤師さんは、禁煙支援にベストなポジションで、「街のカウンセラー」と言えるでしょう。

タバコについて造詣^{そうけい}の深い薬剤師を増やすのも、今後の課題と言えます。こうしているうちに、限りなく黒に近い灰色のタバコ販売の是非について気づくことになります。もう発がん物質を薬局で販売する時代ではないのです。